

特集

身体・運動の発達と障害

特集にあたって

身体・運動の問題は全ての障害に通底する

奥住 秀之

おくすみ ひでゆき
東京学芸大学、本誌編集委員

端から私事で恐縮であるが、私が卒業論文のテーマを「知的障害のある人の姿勢や歩行」にしようとした決めた書物がある。マルクスの盟友エンゲルスの『猿が人間になるについての労働の役割』。その冒頭には次のくだりがある。「次第に直立して歩く習わしを身につけはじめた。これをもって猿から人間に移行するための決定的な一歩がふみだされた」。さらにこう続く。「手が自由になって、…つぎつぎと新しい技能を獲得することができるようになった」「だから、手は労働のための器官であるばかりではない。それはまた労働の産物でもある」。

なるほど、姿勢や歩行、そして手の技能（運動）は、まさに人を人たらしめている特徴なのだ。このような思いをもって始めた研究は、気がつけばもう20年を経過する。少々話題がそれるが、本特集のもう一人の企画者である細淵富夫氏は、東北大学教育学部の松野豊教授（元本誌編集委員）のゼミの先輩にあたる。細淵氏の専門は重症心身障害児の探索活動や対人的情動交流であった。当時の松野ゼミの中心的課題は、ソビエト心理学の理論に基づく知的障害・発達障害児あるいは重症心身障害児の心理機能の探求や権利保障であった。私はそこで障害児・者研究と運動の「イロハ」を叩き込まれた。

話を戻そう。本誌で組んだ特集テーマは、まさに先に述べた人を対象とする研究の最も根源的な領域の1つとも言うべき身体運動の発達と障害である。

特集は2つの視点をもって構成されている。

1つは、運動を物理学的・生理学的水準だけでなく心理学的水準まで含めて捉える視座である（むしろこちらに重点を置きすぎたかもしれないが）。前者を「運動」と呼ぶのに対し、後者を「行為」という言葉で使い分けることもある。運動を多水準的に捉える視点は、ソビエト心理学者のワイズマンやベルンシュタインたちによる「運動の逆説性」や「運動構築の水準理論」などに見ることができ（ワイズマンについては茂木俊彦氏による翻訳と解説がある）、障害のありようを考える上できわめて重要な視座である（詳細は筆者の論文参照）。さらには、「身体」という視点まで試行的にはあるが視野を広げ、この領域の新たな地平を切り拓く可能性を指摘した。

2つは、多くの障害種別や年齢・発達段階の理論と実践に関する研究を取り上げた。たとえば、運動反応に乏しい重症心身障害児の内面に「動きたい」という気持ちを育むことや、運動にぎこちなさをもつ子どもが身体を動かすことを心から楽しむこと、さらには人間にとって重要な技能である歩行を視覚障害児が獲得するプロセスにおける教育的視点、水準の差こそあれ、運動の障害メカニズムや支援法の探究は、いずれの障害種においても重要なトピックの1つであることは明らかである。身体・運動の問題は全ての障害に通底しているのだ。

本特集のいずれの論文も、障害者研究、支援にかかわる全ての人と、きつとどこかでつながっている。